



2020年に入ってから
の新型コロナウイルス(COVID-19)の世界的な
感染拡大は、これまで我々
が常識としていたグローバ
ル経済、すなわちヒト・モ
ノ・カネの地球規模の自由
な移動が当たり前と考えて
いた世界を一変させてしま
った。

グローバル経済は終わったのか

の移動を限定せざるを得
ず、同時にカネの移動の滞
留をもたらしかねない
伝統的な経済学が描いて
きたのは、比較優位に基づ
く地球規模での経済取引を
基礎に置いた経済システム
なっている。

筆者は、2019年10月
29日付の本欄でも紹介し
た、JST・JICAの共
同プロジェクトであるSA
TREP(S (地球規模課題
対応国際科学技術協力プロ
グラム)の採択研究(研究
代表 神田英輝・名古屋大
学大学院助教)として、南
アフリカ共和国ダーバン市
の下水処理場をフィールド
に、微生物類の培養と回収、
それらから抽出したバイオ
燃料の生産、さらには藻の
残渣を肥料用マットへ加工
し有機農業へ活用するとい
う研究プロジェクトに参画
している。

コロナ後の世界と

循環型経済

・サプライチェーンを構築
することが、優秀なグロー
バル企業のビジネスモデル
であった。しかし昨今の新
型コロナ禍の状況では、グ
ローバルなヒトの移動が感
染拡大のリスクであり、各
国での経済活動の自粛が続
く中ではグローバルなモノ



愛知淑徳大学
ビジネス学部 准教授
渡邊 聡

渡邊 聡

型コロナ禍のようなグロ
バルリスクに対応できるよ
うな経済の姿をめざすべき
だろう。グローバル経済は
経済的な利益を世界規模で
もたらすが、同時にグロー
バルリスクに伴う多様な不
利益も世界規模で、しかも
高速に伝播する。したがっ
て、新型コロナ後の世界経
済はこのようなグローバル
リスクに柔軟に対応しうる
レジリエンス(頑健性)を
有した経済システムのあり
方を考える必要がある。

そのようなコロナ後の世
界経済のあり方の一つとし
て、サーキュラーエコノミ
ー(循環経済)がある。サ
ーキュラーエコノミーは、

わたなべ・さとし 環境・資源経
済学。名古屋大学大学院経済学研究
科博士後期課程修了。博士(経済学)。
1979年生まれ。

従来からの3R(廃棄物の
削減・再利用・再循環)の
取り組みとは異なり、原材
料の調達から廃棄を行わ
ず、資源循環を最初から想
定した生産・消費モデルと
なっている。

そのなかで、革新的な技
術をビジネスモデルとして
成り立たせるためのキーワ
ードが、サーキュラーエコ
ノミーである。つまり、下
水や藻、有機農業など従来
使われなかった資源を有効
利用するだけでなく、地域
に資金と人的資源の還流さ
せるような「地域経済循環」
を構築することになる。す
なわち、新型コロナ後のグ
ローバル経済とは、グロー
バル経済による利益を生み
出す一方、サーキュラーエ
コノミーによるモノ・カネ
・ヒトの地域内循環による
「持続可能な地域社会」を
構築していくようなビジネ
スに取り組む必要がある。